

## 特別展 没後 50 年記念 福田平八郎 x 琳派

山種美術館（広尾） 2024. 09. 29～12. 08



「福田平八郎」(1892～1974) は、斬新な色と形を追求した日本画家で、今回没後 50 年を記念して画伯の画業をたどる特別展が 12 年ぶりに開催がされている。

彼は、大正期はモチーフを入念に観察し、写実的に表した作品を制作していたが、昭和に入ると単純な色面と大胆な構図による独自の芸術を確立した。

本展では、徹底した細密描写により写実を極めた大正期の代表作《牡丹》から、造形の特徴を見事に捉えた筍とデザイン的葉が融合した《筍》、丸みを帯びた餅と直線的な形の折り鶴との対比が見どころの《紅白餅三鶴》から絶筆とされる《彩秋遊鶯》まで、初期～晩年にいたる優品の数々が展示されている。

福田平八郎 《筍》 1947 年 チラシ上図

酒井抱一 《秋草鶉（うずら）図》 19 世紀 江戸時代 チラシ下図

「琳派」は、桃山時代後期より近代まで活躍した造形芸術上の流派または美術家・工芸家らやその作品を示す名称である。本作は、繊細な「秋草」と影のように表された「月」が印象的な屏風で、装飾性と緻密な表現を融合させた優品として高く評価されている。



福田平八郎《芥子花》 1940 年 紙本・彩色  
綺麗な芥子の花、ちまちまとした実、ひょろひょろとした茎は、画材としては興さずにはいられないのが「芥子」である。

この組み合わせは、後世を大切に作る画伯にとっては興の尽きないものであったろう。



福田平八郎 《彩秋》 1943 年 絹本・彩色  
秋空に浮かぶ柿の葉に、目に染みるような紅葉の彩りを、色、色で追及し、対象の色彩を追求するうちに、自然の対象の葉の形もとらえていく画伯の真面目が良く伺える作品である。